

国立国語研究所学術情報リポジトリ

会話の方策としてのくり返し

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): repetition, conversational strategy, function in discourse, conversation analysis 作成者: 中田, 智子, NAKADA, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001130

会話の方策としてのくり返し

中田 智子

要旨：本稿では、会話における発話のくり返しがコミュニケーション上の方策としてどのように機能しているかを考察する。様々な種類の会話からくり返しの事例を収集し、それらの持つはたらきを①関説的、②心情的、③動能的、④交話的、⑤詩的、⑥メタ言語的、⑦談話構成的の7つのカテゴリーのもとに分類・記述した。また、くり返しのタイプの違い(自分/他者の発話のくり返し、くり返しをするタイミング、再現の現密度)による機能や表現効果の特徴についても検討した。

キーワード：くり返し、会話の方策、談話における機能、会話分析

Abstract : This paper discusses conversational functions served by repetition of utterances as they are used in communicative strategies. Based on the analysis of 1,078 examples of repetition in various kinds of conversation, the functions of repetition are described under the following categories: ① referential, ② emotive, ③ conative, ④ phatic, ⑤ poetic, ⑥ metalinguistic, and ⑦ discourse-structuring. Repetitions apparently serve different functions and expressive effects according to their type, such as self-/allo-repetition, immediate/delayed repetition, and fixity in form ranging from exact repetition to paraphrase.

Key words : repetition, conversational strategy, function in discourse, conversation analysis

はじめに

書きことばにおいても話しことばにおいても、それまでの文脈に既に現われた語や文などを再び、あるいはそれ以上に重ねて述べることがある。くり返し(反復)の機能や効果は従来から論じられているが、それらは主に詩や小説の文体的技法、または演説などのレトリックについてであり、日常のことばのやりとりを扱った研究はまだ少ない。それは一つには、文学的效果を入念にねらったものに対して、即興的な会話(Chafe 1982)におけるくり返しが多分に余剰的なものととらえられていたためかと思われる。

しかしながら会話には、書きことばや独話にはない大きな特徴がある。それは、伝達が双方向的であること、複数の参加者の相互作用によってコミュニケーションの文脈が動的に作り上げられていくことである。従って、そこに現われるくり返しも、会話に特有なはたらきを担っているはずである。

本稿では、文脈において既に出現した発話をくり返すという行為が会話の方策としてどのように機能しているかを考察する。以下、第1章で<くり返し>の現象の広がりを確認した後、第2章で研究の目的と方法について述べる。第3章では会話例の分析をもとにくり返しの諸機能を種類別にあげ、第4章ではくり返しのタイプの違いによる機能や表現効果の特徴を考察する。最後に第5章で、残された問題点、今後の課題を述べる。

1. 「くり返し」について

会話におけるくり返しというと、「今日ハ寒イデスネー」「エエ、寒イデスネー」のようなやりとりや、「ネエ、チョット見テ見テ」といった発話が思い浮かぶ。しかし、<発話のくり返し>すなわち<既に発話されたことを再び発話すること>は、現象として実に大きな広がりを持っている。

広い意味では、大部分の発話はくり返しの所産である。挨拶ことばや諺、成句の類や基本的構文の使用などは、いずれも形式としての固定度の高い何らかのパターンのなぞりと見ることができる(牧野 1980, 1983, Tannen 1989)。また、「明日学校ニ行キマスカ」に対して「行キマス」と答える、

あるいは英語で主語の人称代名詞がくり返される(省略されない)ように、個別言語の文法と密接に関わるくり返しもある。さらには、言いよどみや言い直し、あるいは「イワユル…」の頻出のような個人の言いまわしの癖などのレベルでも、くり返しは現われる。

別の観点からも、くり返しを分類することができる(Tannen 1989)。まず、くり返すのが自分の発話か人の発話かの区別がある。その場でなされた発話のくり返しか、過去の別の場面でなされた発話のくり返しかということもある(成句などの使用、あるいは過去にかわした会話の発話を下敷にしたくり返しなどは、後者の時間・空間を隔てたくり返しになる)。その場でのくり返しでも、もとの発話にすぐ続くか、間をおいて出現するかとの区別がある。また、くり返す要素の単位の大きさ(語、句、文、など)による分類、もとの発話の再現の厳密度から見た形状面の分類も考えられよう。

2. 研究の目的と方法

2. 1. 目的

本研究の目的は、会話において既出の発話をくり返すという行為がことばによる表出の上で、相手との相互作用の上で、そして会話を運営していく上で、どのような機能・効果をもたらし得るのかを探ることにある。

会話を円滑に進める上で、話者は各種の方策(ストラテジー)を用いている。同じ目的を果たすにも通常複数の手だてが存在する。たとえば相手にわかりやすく話そうとする場合、やたらと難しい単語を使わないようにするのも一つの方法であろうし、ゆっくりとものを言うのもよいだろう。レパトリーの中から、話者は状況に応じた方策を選んで使っている。

そういった方策の一つとしてくり返しはどのような目的に使われ得るのか、方策としてどのような特徴があるのか、またくり返しのタイプによって機能や表現効果にどのような違いが見られるかを、ここでは考察する。

2. 2. 対象と分析の方法

本研究で考察するくり返しの範囲、分析に用いた資料、および機能を検討するための分類の枠組みについて述べる。

2.2.1. 対象とするくり返し

対象は、まず複数話者による会話に現れるものに限った。また、成句や基本構文など広義のくり返し、過去の会話を下敷としたくり返しは対象外とし、もともとなった発話と同じ会話内で特定できる場合だけを考察した。

次に、会話の方策としてのくり返しを検討することが目的なので、文法的性格が強いもの、言いよどみや個人の話し癖と判断されるものは除外した。

一方、考察の範囲を広くとった面もある。自分の発話のくり返しも他者の発話のくり返しも、そしてもとの発話にすぐ続くくり返しも、間をおいたものも、すべて対象に含めた。また形状(再現の厳密性)も、一言一句違わぬ再現だけでなく、意味を保持した言い換えや要約も、下敷となった発話が特定できればくり返しと認めた。くり返される要素も語、句など様々なレベルのものを含んでいる。これらの点を制限しなかったのは、くり返すという行為が会話で発揮し得る機能をまず広く見渡し、その上でくり返しのタイプごとに効果や使われ方の違いを考察するためである。^(注1)

本稿で扱うくり返しとは、同じ会話における既出の発話をなぞることであるが、この行為が必然的にもたらす状態を作用・形・量とでも呼べる三つの異なる角度から眺めてみると、以下のことが言える。^(注2)

- ①もともとなった部分はくり返されることで会話の場に再提示され、くり返されなかった他の部分と比べ、とりたてられた形になる。
- ②くり返しの結果、何らかの形で「同じ」(形式、あるいは意味が同じ)ものがもとの発話とくり返しの発話という複数個分、会話内に存在することになる。
- ③既存のパターンをなぞるのは新しいことを考えて述べるよりも楽なので、より少ない労力で発話量が増やされる。

これらはくり返しという行為の性質上おのずと導かれるわけであるが、場合ごとにそのいずれか、あるいはすべてが特徴的にはたらいて会話の文脈と作用し合うことによって、方策としての機能が生まれるものと考えられる。

2.2.2. 分析資料

分析用の事例は、雑誌『言語生活』の「録音器」欄から得た。同欄は生の話しことばを録音してできるだけ忠実に文字化したものであるが、音調情報や発話の重なり、ポーズなどの記述が欠けており、そのため本稿にもこれらの点の考察は含まれない。しかし一方で「録音器」資料は多種多様な会話を収録しているという長所を持っている。くり返しの機能を会話分析によって考察した研究として Tannen(1989)があるが、同書は友人どうしのおしゃべりを主要な資料としており、現われたくり返しの事例や機能についての議論もその種の会話に特徴的なものに重点がおかれていた。その点を考慮して、ここでは会話の種類を豊富に揃え、事例のタイプや機能の種類についてより広範な見通しを得ることに留意した。

前節の条件に従って資料を検討した結果、111 の会話から 1078 件のくり返しの発話の事例を得た。それらを各種タイプに分類した内訳を示す。

【誰の発話のくり返しか】	自身の発話のくり返し	525 件
	他者の発話のくり返し	553 件
【出現のタイミング】	もとの発話にすぐ続くもの	653 件
	多少離れて出現するもの	425 件
【くり返しとしての形状】	以下の六種類に分類を試みた。	
○再現型（ほぼ同じ形でくり返す）		508 件
	A「頼もしいねえ」 B「ほんと、頼もしいねえ」	
○一部変更型（多少の変更を加えてのくり返し）		392 件
	「収益はあがんねェやナー。たしかに収益はあがりませんよ。」	
○補足型（くり返す際に何かをつけ足す）		68 件

「点数にならない……つまり、出した札以外は点数にならない。」

○言い換え型（意味を保持してことばを言い換える） 62 件

A「Gパンと綿シャツばかり着てからに」B「同じもんばかり着て」

○要約型（内容をまとめた形でくり返す） 15 件

「300 キロまで走れてね……アノー日曜ですと六千円になります……

エー300 キロまで六千円ね」

○対句類 33 件

「あその女中さんの行儀のええこと、お客に対して態度のええこと」

2.2.3. 機能のカテゴリー

くり返し的事例から抽出されたはたらきを分類するための大枠として、以下の七つのカテゴリーを設定した。

関説的機能 対象を指示する機能。何かを述べたり情報をやりとりしたりするような伝達内容重視のコミュニケーションを助けるはたらき。

心情的機能 会話における話者の心情や態度を表現するはたらき。

動能的機能 指示や説得のように会話の相手に直接的な影響を与える（与えようとする）はたらきかけに関わる機能。

交話的機能 ことばのやりとりによる接触関係を保つ上での機能。

詩的機能 音やリズム、ことば遊びのような効果をあげるはたらき。

メタ言語的機能 相手の言ったことばの意味を尋ねるなど、言語そのものについて言及する機能。

談話構成的機能 談話の構造表示や運営に関わるはたらき。

はじめの六種は、Jakobson(1960)による言語の六機能の概念に多少の修正を施したものである。これらは言語的コミュニケーションを成立させる六つの要因（コンテキスト、送り手、受け手、コンタクト、メッセージ、コード）に各々基づいており、談話を伸びていく蔓にたとえれば、いわばその横断面に常に存在する要因をとらえたものといえる。しかし、横に切ると同時に蔓の伸び方すなわち話の流れに沿った観点、談話の運営・構成についての

観点を加えることも必要である(中田 1991 a, b)。そこで、談話構成的機能を補充し、合計七つのカテゴリーをたてた。

いかなる発話にも、これら機能の全部が多かれ少なかれ備わっていると考えられる。しかしすべての機能が同程度に顔を出すのではなく、発話ごとに特に顕著な機能があり、それによって我々は特定の発話を「情報を伝達する発話」とか「感情を表出する発話」などと認識するのである。くり返しの発話についても同様で、原則的にはこれらすべての機能を備えているが、やはり中でも特徴的な機能が一つあるいは複数、事例ごとに認められる。

ここでは、くり返しの持つ機能がこれらのカテゴリーのどれに特に顕著にあてはまるかで事例を大まかにラベル付けし、さらにその中で内容を具体的に見た。一つのくり返しに複数のラベルが付く場合も少なくなかった。以下に、種類ごとの該当件数の内訳を示す。

関說的機能	350 件
心情的機能	504 件
動能的機能	145 件
交話的機能	311 件
詩的機能	80 件
メタ言語的機能	20 件
談話構成的機能	173 件

3. 会話におけるくり返しの機能

事例分析の結果得られたくり返しの機能のバリエーションを、前章で挙げたカテゴリーごとに記述していく。

3. 1. 関說的機能

反復的／連続的なことがらの描写

ものごとを指し示し、言い表わすくり返しのはたらきとしては、まず反復的あるいは連続的に起こることがらを描写することが挙げられる。

<例1>テストの結果を語る中学生の娘とその母 (278) ^(註3)

子 国語のテスト失敗したと思うから、あしたがんばろうと思って……

母 なんだ、やっちゃ失敗、やっちゃ失敗じゃない。(うん。)ひとつ、
どんと来ってのはない? (カッコ内は相手のあいづち)

「ヤルタビニ失敗」「イツモ失敗」といった言い方もできるだろうが、同じ言語形式をくり返すことが事態がくり返されることにそのまま重ね合わされて、実感のある表現となる。

ポイント強調、理解の徹底

何かを述べたり情報を伝えたりする際、発話のすべての部分が同等の重みを持つわけではない。話し手は、特に重点をおく部分を何らかの形で受け手に印象づけ、理解を促そうとする。その場合、そのポイントを二度、三度と提示することは有効な手段となる。

<例2>団地での近所付き合いの範囲についての発話 (182)

階段の、しかも、上と下では、ちがうんですよ。つまり、階段が四階ぐ
らいまでと、四階から上と、上と下でちがうんですネ。(中略)だから、
下も一、二階、四階ぐらいだったらいいけどさ、ままた下から上まで。そ
うでない八階ぐらいになるとさ、上と下ではちがってくるわけですよ。

団地の同じ棟でも上の方と下の方では別々のコミュニティが形成されるという話だが、話者は「上ト下デハチガウ」という点を強調しつつ、それを説明する部分(点線部)も補足や言い換えをまじえてくり返ししながら述べている。内容を確実に伝える上では、何度も情報を与えてすりこんでいくことが一つの主要な方策となる。また、ことばを換えたくり返しは理解を助けるだけでなく、くり返しの持つ「くどさ」を軽減するのにも用いられる。

質問に答える時にも、問いの文をくり返すことで内容を強く押し出すことができる。

<例3> トランプのルールの説明 (328)

A 最初に、一番最初に親が親ってんだな、出したね、マークね、持ってたらずさなければいけません。

C 正直に？

A 正直にですよ。

「エエ」や「ソウデスヨ」と答えるより、「正直に」がくり返されることで強調効果が出る。この例のくり返しなどは、話者の発話姿勢（確信、重々しさ、「当然ジャナイカ」という気持ち、など）を表わしたり、相手への指示の力を強めたりする方策としても同時に機能し得る。

受信応答と確認、および問い返し

情報の受け手によるくり返し、すなわち聞いたことを復唱するようなものは、受信の応答と聞き取りの正誤確認を同時に行なうことができる。同じ応答でも「ハイ」や「ア、ソウデスカ」は聞き間違いがあつた場合チェックできないが、情報の復唱は伝達を円滑にしつつ確実性を高める効率アップの機能がある。また、聞き取ったことに自信のない場合には、わからない部分や確かめたい部分を再提示し、問い返しや確認要求をすることができる。

<例4> 電話で道順を聞く (283)

男 そいじゃねえ、(はい)上野までいらっしゃってね、

A 上野まで？

男 上野か、それとも、日暮里。

A はあ、上野か日暮里。

長い話や複雑な内容の場合は、受け手が自分なりに言い換えたり要約したものをくり返すことも、確認としては効率がよい。

ワキの聞き手への伝達、理解補助

情報の受け手が自分のためというよりむしろワキに存在する他の聞き手の理解を助けようとする場合、いわば＜聞かせの発話＞として上記の確認のくり返しをしてみせることもある。たとえば、ラジオの電話相談で質問者からの質問を司会者が聴取者のためにくり返す、授業中に生徒の述べた意見を教師がクラス全体に徹底するようにもう一度まとめる、などの場合である。

3. 2. 心情的機能

この機能に密接に関わる概念に、involvement (Chafe 1982, 1985, Tannen 1984, 1989)がある。これは、「会話において話者が話に心情的に入りこんだり、相手と共感を分かち合ったりすること」という意味合いの用語である。Tannen(1989)は、くり返しは話者の involvement を表出したり、参加者相互の involvement を高めるための方策だと指摘した。また Chafe(1985)によれば、involvement には話者自身の熱中した心理状態、話の内容への積極的関与、会話の相手との共感・一体感という三つの種類がある。

話者の心情の表出

くり返しは興奮、楽しさ、不満、憤りなど、話者の様々な心情の高まり、心の動きの現われとして出現する。気分のボルテージが上がっているので、一度言えばすむことを思わず何度もくり返すのである。以下はその最たる例で、動転のあまりやみくもにことばを重ねるものである。

＜例 5＞火事の通報電話 (26)

指令室 ハイ。119 番消防庁デス。

B (若い女の声) 火事！火事！火事デス火事デス。

たて続けの発話によって恐怖、必死な思いがありありと伝わっている。心情表出の効果の点では、心理状態をことばで明示的に説明してしまうよりも、こういった感覚的なインパクトが有効なことが多い。

話の内容に対する話者の姿勢・態度の表出

くり返しによる強調は、前節で述べた伝達の徹底という実用上の効果もさることながら、その部分の内容に話者が何らかの思い入れを持っていることを示す。せっぱつまった頼み事をくり返すこともあれば、情報としての重要性や信憑性に確信を持って何度も述べることもある。次の例では、反論されても意見をくり返すことによって、話者が確信の強さを表明している。

<例6>女子中学生の会話 (416)

M CちゃんとD(友人の名)は似てるん。

K 嘘だあ！

M うん。絶対、後姿似てるよ。

K 本当に？だって髪型とか身長の高さとかふとり具合なんか違うで。

M 髪型が絶対似てるよ。

また別の例では、話者がモーツァルトの協奏曲について「哀調があるんだよな。モーツァルトの悲しさがあるんだよな。」と述べている。これなどは、感慨を込めるあまり一度言っただけでは気がすまず、再びことばをかえて言うものである。

相手の発言への反応を表わす、受けのくり返しもある。声音や表情を変えらることで、興味、感銘、驚き、当惑、怒り、不承認、賛同、など様々な種類の反応を表現することができる。

<例7>鼻の治療について (237)

妻 切るの見たの？あんだ。

夫 いや。

妻 あたし見たわよ。

夫 おまえ見たァ？ (ウン。) 俺は、モー目をつむっちゃったもん。

相手に対する話者の姿勢・態度の表出

<例7>のようなくり返しは、時にはそこに込められた表情がそのまま相手に対する肯定的／否定的態度の表出にもなり得る。ある発言の内容に対する態度と、その発言をした人物への態度は、往々にして区別が難しい。

また、くり返しは相手に対する敬意を表わす手段にもなる。

<例8>みやげ物屋の店員と客 (131)

客 これ一箱とこれ一本だと、こっちのがとくだね。家で使うには。

店員 エー、そうですね。おうちでお使いになるには、そのほうがおとくでございますね。(そう。)ハイ。

客 分量が多い?

店員 そうです。分量は多うございます。

客の質問をいちいちくり返す形の返答によって、丁寧で愛想のよい感じが出ている。丁寧な返事なら「ハイ、サヨウデゴザイマス」でもよさそうだが、やはりこうした答えの方が、気持ちのこもった印象を与える。ここで感じられる丁寧さとは、ぞんざいさ、そっけなさの反対の極にあるもので、従って、発話の増量というくり返しの特性と関係があるのではないかと思われる。牧野(1980)も、質問への答えに省略を用いずに質問文の反復を使うことが敬意表現につながると指摘している。

また、関説的機能で見たように相手からの情報を復唱して受けることも、情報尊重の態度を通してその情報の送り手である相手への敬意を表現することにつながる場合がある。

相手との共感・一体感の表出

Tannen(1989)は、会話の相手との共感を出表する方策としてのくり返しの機能を強調している。

<例9>鉄道運賃の値上げについての男子大学生の会話 (417)

A 今度、な、何がアガルンダッタケナー。

- C メーテツ(名鉄が)上がるよ。
- D 名鉄が上がるね。
- B ウソー！メーテツ，上がるの？
- C メーテツ上がる。
- D 上がるよ。
- B じゃ，ヤッパ，国鉄にしよう。

特に実質的な意味はないが，次々に相手と同じことばをくり返すことによって互いの共感や連帯感を確かめ，強め合っている。この種のくり返しは，おしゃべり自体を楽しむ会話によく見られる。もう一つ，例を見てみよう。

<例 10>テレビのインタビュー番組。Aは司会者。(263)

- A 誰の歌が好きなの？
- 夫 クールファイブの歌。
- A クールファイブ。
- 妻 女の人では島倉千代子が好き。
- A 島倉千代子が好き。

ここでは，情報の確認というよりも相手の話に寄り添うように聞き手役を勤め，心情的に近づくことで話をスムーズに引き出そうとしている。「フウン」「ナルホド」といったあいづちをうつことも可能だが，同じことばで受けることでかけ合いのテンポが生まれ，話がはずんでいく。

上述の共感，同意や納得といった論理のレベルを超越したものであり，それだけに同じことばを相手に続いて口にすることから生まれる感覚的效果が，他の手段では代えられない独特な役割を果たすと考えられる。

3. 3. 動能的機能

はたらきかけの力の強め

依頼，指示，説得，申し出，抗議など，相手に直接はたらきかける行為は，

度重ねてなされることで威力が増す。特に、次の例のようなたて続けのくり返しは、瞬発的な押しの強さを生む。

<例 11>女子高校生の会話 (208)

A じゃ、写真、アレ、借りて、

B でも、あんまり知ってる子いない。

A いいわヨ、ただ「お友だちが貸してください」ってったら貸してくれますかってサア、かしてくれるわヨ、借りてきてヨ、ネエ、イヤッ、借りてきてッ、ネッ、かりてきてえねえ、ネッ。

こうした一方的なくり返しは、強引で子供っぽいといったマイナスの印象を与えるので、使える相手や場面が限られる。しかし、話者の一所懸命な態度の表出(3. 2参照)のように見せかけながら相手に圧力を加えていくこともできる。

一方、じわじわと力を増すくり返しもある。相手が反応しなかったり従わない場合に、様子を見ながら根気よく（または執拗に）はたらきかけを重ねて効果を上げることがある。以下では、「明日電話スル」という申し出に逃げ腰な相手がなかなか同意しないのを、徐々におしきっていく。

<例 12>言語調査のインフォーマントに約束をとりつける (284)

調査員 それじゃああしたにでも電話で御都合のいい時間をうかがうことにいたしましょうか。あの一、夜なんかはいらっしゃいますか。

被調査者の妻 えー あのきまってません。

調 ああ そうですか。それじゃあやはりあした電話させていただきますしょう。

妻 ああ そうですか。あしたはたぶんいないと思いますけど。

調 いちんちじゅう……

妻 はい ちょっと打ち合わせがあるんで……。で、何時に帰ってくるかわかりませんし。

調　じゃあ　とにかく電話をさせていただくことにして……

(中略)

調　それじゃあ、すみません。あしたお電話させていただきますので、
よろしく願いいたします。

くり返すことで譲らぬ姿勢を示すのは<例 6>と共通している。強引な印象を与えないように、ことばつきは控えめにしながらくり返しによってはたらかかけを強めるというのは、説得などでよく用いられる方策である。

くり返しによってある種の行為を成立させる

似たような発話が重ねられることが行為としての特徴となっており、くり返しが出てくることではじめてその行為らしくなるものもある。説教や言い聞かせ、文句、愚痴などがその類である。

反論などの方策として

反論に用いられるくり返しは、時によって異なる方向で機能する。

<例 13>服を買っている親子。互いの選ぶものが気に入らない。(95)

母　暑っ苦しいのばかり選ぶね。

子　こっちだって暑っ苦しいよ。

<例 14>犬の飼主と獣医の会話 (206)

飼主　エビオスなんかいいっていうんで、エビオス少しやってるんです。

獣医　エビオスなんかもいいけど、アリナミンの方がよっぽど単位が強い。

どちらも相手の言いまわしをとりこむことで反論につなげているが、前者は「暑ッ苦シイ」を逆手にとって反撃手段に用いている。後者では、くり返しによって相手にいったん合わせてみせることが、反論の前のやわらげの方策になっている。相手の発話のくり返しが共感や一体感を喚起することは既に

述べたが、それが摩擦を起こしやすいはたらきかけ（反論、抗議、断わりなど）のやわらげとして感情調整に利用されることも少なくない。

3. 4. 交話的機能

コンタクトの修復、保持、再開

ことばをかわすことで成り立つ接触状態の最も基本的なところでは、くり返しは会話のチャンネルがうまく作用していない（相手に発話が届かない）時にそれを修復するために行なわれる。

<例 15>ビデオショップで。S は店員，A は買手。(358)

S 画角は、こちらでズームがききますから。

A え？

S ズームがききます。

次に、とにかく何かを言い続けて接触状態を保つような場合も、容易に発話量を増すことができるくり返しは便利である。次の例のような街頭販売では、仮に実質の内容がそれほどなくても、ことばを絶やすことなく聴衆の注意を引きつけておくことが重要である。

<例 16>野菜汁製造器の街頭販売 (317)

肝臓障害の場合にね、ひどくならないうちにやってほしい。大根やカブの葉っぱ、それにリンゴをシンごと。これは肝臓には最高にいいんですよえ。悪くならないうちにやってほしい。ねえいいですか。胃が悪い時には大根やカブの葉っぱ、アロイ、肝臓の悪い時は大根やカブの葉、それからリンゴをシンごと、これが最高にいいわけです。

いったんとぎれたコンタクトを取り戻す場合、前のやりとりの内容をくり返して発話することで、より自然に会話を再開することができる。

<例 17>植木市での客と植木屋のやりとり (289)

客 本なんか見るといって、花咲いたあとに植え換えやってますがね。

植木屋 ああ、花咲いたあとネ、植え換えいいですね。それで上もバリバリバリバリ切ってネ。

客 そう、やってんの。それは毎年やってんだけどね。こういう小さいのはまだ買ったことないのよ。

植 やっぱりある程度伸ばしといてネ、それから……。

客 たとえばこれですね、今、植えますね。

植 ああ植えてネ、それでネ、こういうふうに作るよりもネ、一年伸ばしちゃうの。

(他の客が話しかけてきたため、植木屋はしばしそちらに應對)

客 伸ばしきり伸ばして、それで来年はいつごろ植え換えたほうがいいんですか。

植 やっぱり三月。

客は、植木屋と再び話を始めるきっかけとして、会話がとぎれる前の話の要点（「植え換え」「伸ばす」）をくり返している。これによって、話が滑らかに、まるで中断がなかったかのように続いている。

会話への参加・寄与

発話量が増せば会話は賑やかになる。仮に自分から話す内容がなくても、あいづちをうつなどとにかく会話に参加することで、話者は誠意を示すことができる。逆に、口が重い話者に対してもう一方が積極的に発話を増やすことで、やりとりが停滞せずにすむ場合もある。各々の目的の方策としてくり返しが用いられる例を以下に示す。

<例 18> 特売場で子供の服を選ぶ妻の傍らで、夫が時折ことばをはさんで協力的態度を見せようとしている。(95)

母 (ぶらさがりのアロハを見始める)これ、ナイロンか。これ。

父 うん、ナイロン。

子 母ちゃん。これは？（グレーのシャツを引っ張り出す）こんなの
ほしいよ。ほく。

母 これ。肩章ついてて、おまわりさんみたいだねえ。これ、熱帯魚
すばらしいのがあるじゃないの。これ。

父 熱帯魚。

<例 19> 平日の昼間、繁華街にいる中学生に話しかけた少年補導員（84）

係員 遠足、ドコニ行ッタノ？

少年 ウン。（しばらく、考えている）アブラツボ。

係員 アー、油壺トイウ所ニ行ッタノ。（中略）アノネ、今日、オコズカ
イ、ドノグライ、持ッテ来タノ？

少年 百五十円。

係員 百五十円、貰ッテ来タンデスネ。何ノ映画見ニ来タノ？

あいづちだけなら「へエ」「ア、ソウ」などの応答が最も手軽だろうが、あまり続けると気のない印象を与えてしまう。<例 19>では、補導員ができるだけことば数を多くしたくり返して話をもりたてようとしている。相手の発話のくり返しは心情的に近づくことにもなり（3.2 参照）、よいコンタクトを保つという点でもより目的にかなっているといえよう。

時間かせぎ、間つなぎ

発話の増量効果を利用して、くり返して時間かせぎをすることもある。たとえばもったいぶったり照れたりしてわざと発言を遅らせる場合などである。

<例 20> 父親になりたての人に同僚が話を聞く（292）

S 赤ちゃん、どうだったんですか？

H うん？どうだったって？

S かわいかったんですか？

M どっち似？

H かわいかった……親にきくのはねえ、答えようがないねえ。

くり返しの発話は、会話の相手側が聞き取りに要する労力も少なくてすむ(Tannen 1989)ので、質問の答えなどを考えている相手のために間つなぎをしてやることもできる。以下の例の調査者の発話は、ことば数こそ多いがパターンのくり返しが殆どなので、理解に要する負担は少ない。相手はその間に答えを考える余裕が得られる。

<例 21>ことばの調査で (256)

調査者　そういう社長さんなどに言うときに、自分のおとうさんのことを言うときに、チチオヤが、と言うでしょうか。オトウサンが、と言うでしょうか、チチが、というふうに言うでしょうか。

被調査者　やっぱ、チチですね。

3. 5. 詩的機能

ことばのリズム、テンポ

くり返しによって同じパターンのものが重なることから、ことばの調子のよさ、一定の発話のリズムが生まれやすくなる。以下の例では「オールシーズン使える」という発言の意味をさらに強める効果も同時にあげている。

<例 22>デパートのバーゲン。草履売場で娘と買い物する母。(95)

…安い時に買っておけばさ。また、とっとけば、革だから大丈夫よ。こんなのさ、こんなの、何時でも、冬でも夏でも秋でも春でもいいのよ、
この色は。

ことば遊び

くり返しは、ユーモアを含めたことば遊びの道具にもなる。対句、語呂合わせのしゃれ、造語の例を各々見てみよう。

<例 23>夏休みの旅行の話をする小学生 (253)

だいぶ遠いんだ。一日はかかる。まず、朝行くと夜に着いちゃって、夜行くと朝に着いちゃう。

<例 24>書道クラブの作品合評会で (220)

a Cさんの字は何流ですか。

C 知らないですよ。我流でしょ、多分(笑)。

A 亜流じゃないですか(笑)。

<例 25>同僚どうしの会話。コーヒーを飲んで種類をあてる (279)

N なんていうものですか。

S・K それをあててもらおうと。

S それはききざけじゃないですね。

N なんですか。

S ききコーヒー(笑)

3. 6. メタ言語的機能

ことばの意味の確認

言語自体に言及するはたらきとしては、発話に用いられたことばの意味について互いに明確にし、共通の了解を得るということがある。一つの方法は、自分が言ったことをさらにわかりやすく言い換えることである。

<例 26>患者と話す医師 (13)

デスカラ 生活年齢 暦年ニヨル年齢ワ年ゴトニ 一ツズツフエマスケ
レドネ 他ノニツオ 若ク保ツ事デネ……

相手の言ったことばの意味がわからない時は、くり返しによってその部分を提示し、説明を求めることができる。

<例 27>クラブ活動についての中学生の会話 (416)

K (私は)第二希望が茶花道。

M サカドーって？

K お茶。

ことばのとりたて

相手のことばづかいが面白かったり珍しかったりした場合にそれを取りたててくり返しもある。

<例 28>テレビのインタビュー。大阪で話しているのに、福岡から広島に行ったことを「来る」と言ったため、司会があげ足をとる。(263)

夫 福岡から広島の東洋工業っていう会社に来まして、一年間……

A 来まして (笑) ここ大阪や。ええむこう行きまして。はい。

これなどは、相手の発言に対する興味や感情的反応を表わし、とりあげるべきポイントだと思う部分を再提示するくり返し(3.2 参照)と同類である。ただ、こちらは関心が発言の内容でなくことばそのものに向けられている点で、メタ言語的機能を持っている。

3. 7. 談話構成的機能

会話は、参加者が互いに協力して作りあげていくものである。従って、時に応じてとりあげる話題などに関する心づもりを相手に知らせたり、話の進み具合を相互に確認し合ったりする手だてが必要となる。くり返しにも、談話の構造を示したり談話の運営・構成を助けたりする機能を備えたものがある。

結束の表示

談話の構造の表示として、まず話の筋のつながり具合を明確にすることがあげられる。語のくり返しは、発話間の結束性を表示するひとつの手段となる(Halliday and Hasan 1976)。特定の語が会話のあちこちに出現して、キーワードとして話を統合していく場合もある(中田 1991 a)。

以下の例では、前の発話の一部をしりとり式にくり返すことによって、道

順の説明という話の主要な筋を明示的に浮かび上がらせている。

<例 29> 女性が B に電話で道順を説明する (283)

女 つぎの大井町でおりてください。

B 大井町ですね。(はい) はい。

女 おりるとすぐ 階段がありますから、

B はい。アノ、出口は一つですか。

女 エート、二つあるんですけどね。(はい) アノ、階段をのぼって

(はい) 左のほう。

B 左手ですか。

女 西口おでになるんです。(はい)

アノーでましたら右のほうへ……

談話の展開に言及する手段としては、各種のメタ言語表現(杉戸 1989)も可能であろう。たとえば話のつながりを示すには、「ソレデ、先ホドノ続キデスケド…」と前おきして始める方がより明確である。しかし、そうした表現は明示的なだけに何度も用いるのはうるさい感じがする上、たびたび話を遮られることに対して話し手がいらいらしている印象を与えかねない。その点、くり返しはあまり目立たずに何度もつながりの表示を行なえる。

談話におけるまとまりの収束の表示

くり返しがひとまとまりの発言や話題を統轄し、それらが収束段階にあることを示すマーカールの役割を果たす場合がある。それまでの話の内容を要約するようなくり返しは、一つの話題が収束し得るポイントを作り出し、次の段階への移行を起こりやすくする(中田 1991 a)。以下では、発言を統轄し、収束させるくり返しの例を見る。

<例 30> ことばの調査における質問と答え (256)

調査者 これは、バスの中で、お孫さんを連れていっしょに乗ってたと

します。そうすると、学生が席をゆずってくれようとしたんです。ところが次の駅で降りるので断ろうと思うんです。そのときに、この学生になんと言うでしょうか。

被調査者 わたしならまあ、スグ オリマスカラ ケッコオデス アリガトウ ゴザイマス。一応礼を言わなきゃ、席をゆずってくれたんだから。ありがとうございました、すぐ降りますから、と。めんどうくさいから、立ったりすわったりするの。それでも一応そういう今の世の中のね、こういう席をゆずってくれる若い人っていうのは、たんとないからね。わたしはこういう場合は、礼を言うね、一応は。

岡本(1990)によれば、それまでの話の内容をまとめたり、既に出た話題を呼び戻すことは、電話会話の終結部を開始する方策となる。この指摘は、通常の会話における発言や話題のレベルの収束にも適用可能と考えられる。

話題を呼び戻す、話の筋を修正する

会話の展開の仕方を操作する機能である。会話の前の部分に出てきたことをくり返せば、上述の結束性によってもとの発話の部分へと話が再び結びついていき、それによって少し前に出ていた話題を呼び戻すことができる。

<例 31> 旅先で知り合った者どうしのおしゃべり (169)

男 池袋の、あのう、「山小屋」ってあったでしょう？

女3 歌声喫茶？

男 歌声喫茶……。あんなものなくなっちゃったんですか？

女3 あんでしょう。

女1 あの辺変わっちゃったわね。

男 二階がバーになっていて、鏡かなんかがガッチリこう……。

女3 あの辺すごく、もう全然かわっちゃって、あたしなんかもわからないもんねえ。「山小屋」？あ、あるかも知れないわ。……

男が歌声喫茶の話を出す、女1が「アノ辺（池袋）変ワッチャッタワネ」という話にもっていく。女3も女1の出した方向に一旦のりかけるが、「山小屋？」と男の発話をくり返すことで話題を戻してやる。

こうした場合にも、「サッキノ〇〇ノ話ダケド…」などのメタ言語表現が使えるが、時には明示的すぎて大げさな感じがすることがある。メタ言語表現は強い効力を持っており、それに対してさらに別の話題を出したりすれば、＜会話のマナー＞に反することになる。一方、＜例31＞のようなくり返しはむしろ何気なく話を戻すための方策で、強いイニシアチブをとった感じを与えずにすむ。ただし、明示性が低い分だけ拘束力も弱く、すぐ別の話者に他の話題を導入されてしまう可能性もある。

くり返しを利用して話の方向や話題を保持することもできる。こちらは、話が横道にそれかけるのを防いだり、それた筋道を修正するなど、話題の呼び戻し以上に強い操作といえる。

＜例32＞小学生の子供を持つ母親たち。ランドセルについて。(353)

- A 牛革はね M で失敗したから私は反対したんだけど、主人がどうしても牛革って言うから。うちは手入れしないのよ。
- B 主人がもう一つ買ってやれるって、(笑)あの値段なら。
- A 牛革は手入れしないとダメよ。雨が降ると。
- C うちは男の子でしょ。ランドセルひょいとそこらへんに置いて遊んで帰ってくるわけ。もう真っ白でしょ。……

Aが「手入レ」の話を出した後、Bの発話によって話題が牛革の値段の方に行く可能性が出てくる。そこでAは再び「手入レシナイト」と同じことをもちだし、それをCが受けて、牛革ランドセルの手入れへと話の方向が安定する。この例ではAがくり返しに込めた意図を他の話者が受け入れているが、口論など参加者が互いに非協力的な場合は、各々が相手には耳をかさずに自分の言いたいことをくり返し合い、ちぐはぐな会話が展開することもある。

3. 8. くり返しの諸機能についてのまとめ

以上、事例の検討をもとに会話においてくり返しが果たしている機能を挙げたが、それらをくり返しが持つ三つの側面との関わりで整理してみる。第2章で、本稿で扱うくり返しの行為がもたらす状態を、①既出部分を再提示する、②同じ形のことを複数存在させる、③少ない労力で発話量を増す、と

表1 くり返しの三つの側面と機能の関わり

機能の種類		再提示	同じ形	増 量
関説的	反復／連続的なことの描写 強調・念押し、理解の徹底 受信応答・確認、問い返し	○ ○ ○		
心情的	感情の表出 話の内容に対する姿勢表出 相手に対する姿勢表出 相手との共感・一体感表出	○ ○ ○	○	
動能的	はたらきかけの強め 反復を特徴とする行為遂行 反論などの方策	○ ○	○	
交話的	コンタクトの修復・再開 コンタクトの保持 会話への参加・寄与 時間かせぎ・間つなぎ	○		○ ○ ○
詩的	ことばのリズム・テンポ ことば遊び		○ ○	
メタ 言語的	ことばの意味の確認 ことばのとりたて	○ ○		
談話 構成的	結束の表示 発言・話題の収束 話題の呼び戻し 話の筋の修正	○ ○ ○	○	

してとらえた。これらは一つのことの異なる側面といえるが、そのうちでどの面が特に顕著に作用しているかは機能によって異なっている。機能の種類ごとに特に関わりの深い面を○で示したのが、表1である(ゴチック文字の部分については後述)。

表1で見ると、再提示によって特定の発話部分を取りたてるという側面が特に作用しているのは、伝達・表出を効果的にしたり、内容(用いられることば自体を含む)についての共通理解を確立するような機能、および発言・話題の収束や話題の選択など、談話の展開に関わる操作を行なう機能である。

同形の発話が複数できた結果、「同じ」ものどうしの間にある種の結びつき、または緊張状態が生まれる。結びつきの関係がもとになっている機能としては共感の表出、ことば遊びやリズム、結束の表示があり、緊張関係に基づくはたらきには反論におけるあげ足とりがある。

発話の増量の面は、接触状態の保持、会話のもりたてといった交話的機能に結びつく。

《英語の会話分析に基づいた指摘との比較》

Tannen(1989)は英語会話の分析に基づいてくり返しを研究し、網羅的ではないと自身で述べながらも、かなりの種類の機能を記述した。本稿では、同書での指摘が日本語のくり返しにもあてはまることを確認すると同時に、分析資料を多様にすることでその他の機能も観察することを目指した。

表1でゴチック文字にしてあるのは、本稿で新たな指摘を行なった点のある機能である。ゴチック文字でないものはTannenが既に指摘している機能で、日本語の事例からも同様のはたらきが観察されたものである。

Tannenは友人どうしのくつろいだ会話を分析し、情動的・交話的・詩的機能を持ったくり返しを豊富に観察した(ただし、Tannenは機能の分類カテゴリーは特にたてていない)。これらについては、日本語のくり返しにも同様のはたらきがあることが確認された。交話的機能のうち、とぎれた話の再開、および相手に間を与えるくり返しについては、新たに指摘した。もっ

とも、後者は<例 21>のような調査の場面などかなり特殊な場合に限られるのかもしれない。動能的機能について本稿で特に述べたのは、同じくはたらしめかけを強めるにもたて続けのくり返しと間をおいたくり返しとが方策として異なる効果をあげる点である。

資料の性質上 Tannen の分析に現われにくかったのは、関説的機能である。ここでは道順の説明や、店で店員から商品に関する情報を得るなど、事実の伝達が主となる会話をもとにこの機能を記述した。メタ言語的機能にも着目したが、この機能は言及の焦点がことばそのものである点が特徴的なものの、関説的および心情的機能と性格的に共通するところが大きい。

関説的機能を持ったくり返しは、英語でも情報伝達が主となる会話には現われるのではないと思われる。その点は今後確認したい。

談話構成的機能については、発言・話題の収束、話題の呼び戻し、話の筋の修正という点をここで指摘した。Tannen はくり返しをきっかけに話が別の方向に移る例を挙げているが、特にそれをくり返しの収束機能としては明らかにしていない。むしろ、本稿で指摘したものとは別種のくり返しを、話題と話題の境界を示すマーカーとして指摘している (pp.69-71)。それは、もとの発話と相手によるそのくり返しという一つのペア (互いに隣接している) が挿話の始めの部分に現われ、終りの部分にもまた別のペアが現われるというもので、ちょうどテーマ設定と終結のコードの役割を果たしているという。今回検討した資料にはその種のくり返しの例は見られなかったもので、日本語でも同じことが言えるかどうかはまだ確認できていない。

ここで用いた七種のカテゴリーのうちでも、談話構成的機能は言語によって具体的な内容が異なる可能性が最も高いのではないかと予測される。談話の構成・運営にくり返しが役割を果たす点は共通かもしれないが、実際にどのような文脈でどのような方策として用いられるかについては、違いが出てくる可能性がある。談話の進め方のルールや方策は、社会・文化的な影響を受けやすい部分だからである。この点も、日英およびその他の言語間対照研究の今後のテーマとして興味深い。

4. くり返しのタイプによる機能・表現効果の違い

第2章でくり返しを出現の仕方や形の上から分類したが、それらの種類の区別に関係した機能や表現効果上の違いを検討する。結論として一般化するには事例数がまだ充分でないが、傾向として指摘しておきたい。

4. 1. 誰の発話をいつくり返すか

自分の発話のくり返しと他者の発話のくり返しは事例にほぼ同数ずつ含まれていたが、前章であげた各種のはたらきの多くはそのどちらかであることが特徴的になっていた。また出現のタイミング(すぐにくり返すか間をおくか)も、はたらきの種類によって自ずと決まる場合が多い。

以下の表2では、これら二つの観点すなわち、

①自分の発話をくり返す(ことが多い)か、他者の発話をくり返す(ことが多い)か。

②もとの発話にすぐ続いてくり返す(ことが多い)か、間をおいてくり返す(ことが多い)か。

を組み合わせるタイプを分け、今回の事例から見て各々にあてはまるはたらきにどのようなものがあるかを示した。

表2には、空欄が二つある。まず、両方の観点に関して「どちらともいえない」というものはなかった。つまり、ここで挙げたどの機能も、少なくとも①か②のいずれかに関しては特徴を示したということである。また、他者の発話を間をおいてくり返すことが特徴となるものもなかった。表に示されるように、他者の発話のくり返しは相手の発言への応答や反応なので、もとの発話から離れてしまうとあまり意味がなくなるのであろう。実際、他者の発話を間をおいてくり返していた事例は全体の7.7%と少なかった。

次に、①の観点からの区別(縦割の分類)を見てみよう。自分の発話のくり返しには主として一方的な表出のはたらき、他者の発話のくり返しには相互作用的性格の強いはたらきが各々対応している。どちらともいえない「時間かせぎ・間つなぎ」「話題のまとめ」などは、場合によってどちらの発話の

くり返しでもあり得るものである。

②の出現のタイミング(横割の分類)に関しても、それぞれに対応するはたらきの種類から、タイプ別のくり返しの性格が見えてくる。もとの発話にすぐ続くくり返しは、どちらかと言えば反射的に行なわれた感じを与え、相手の発話への反応や話者の感情の動きを生き生きと表わすことができる。話を停滞させないための交話的なはたらきや、会話に出てきたことばにその場で言及するメタ言語的機能にも効果をあげる。一般にこの種のくり返しが続くとやりとりのテンポがよくなるが、特に詩的機能においてはことばのリズムなどの妙味に寄与している。

間をおいたくり返しは、むしろ会話のなりゆきや相手の反応を見ながらな

表2 くり返しのタイプと機能

② \ ①	自分の発話のくり返し	どちらともいえない	他者の発話のくり返し
すぐ続く くり返し	反復的／連続的なことの描写 コンタクトの保持 ことばのリズム・テンポ ことばの意味の説明	時間かせぎ・間つなぎ ことば遊び	受信応答・確認、問い返し 質問への回答 相手の発言への反応 同意・共感の表明 会話への参加、あいづち ことばのとりたて
どちらとも いえない	伝達における強調 心情の表出 話の内容に対する態度表出 相手へのはたらきかけの強め		反論などの方策
間をおいた くり返し	反復を特徴とする行為遂行 話の筋のつながりの表示 発言のまとめ 話の筋の修正	コンタクトの再開 話題のまとめ 話題の呼び戻し	

されるものであって、談話構成的なはたらきなど、より冷静に会話の方策として用いられることが多い。

しかし、ここで特に興味深いのは、「どちらともいえない」の欄に属するはたらきにおける出現タイミングの使い分けである。元来、伝達内容の強調や心情表出、相手へのはたらきかけにくり返しを用いるのは、自発的・積極的な表出態度のあらわれであるが、時にはそれがくどい、押しつけがましい、子供っぽいなどの好ましくない印象を生むこともある。たて続けのくり返しの場合には特にその可能性が高い。そこで、そういった印象を緩和する一つの方策として、もとの発話にすぐ続けずに間をおくという手段が用いられるのではないかと考えられる(3.3, <例 12>参照)。今回の事例では、強調やはたらきかけなどの機能を持つくり返しの 2/3 以上が間をおいたものであり、すぐ続けるタイプが現われるのは話者の感情が高まっている場合、家族など親しい相手と話す場合などと、かなり状況が限られていた。

4. 2. くり返しの形状

まず、機能のカテゴリーごとに、再現型、一部変更型、補足型、言い換え型、要約型、対句型の六種の出現傾向を見ていく。

関說的機能

反復的/連続的なことがらの描写は、再現型を利用している。

受信応答や問い返し、質問への回答では再現型が多いが、自分から情報を伝える際の強調には一部変更型・言い換え型・補足型などが多かった。後者のように聞き手にとって新情報にあたる部分をくり返す場合には、単なる再現ではなく変更や補足、要約などの処理を加えて再提示の方が理解補助の上でも効果的なであろう。

要約型は事例数自体が少なかったが、15 件中 10 件が関說的機能を持っており、情報伝達、受信確認のどちらにおいても用いられていた。

心情的機能

話者の心情表出には再現型が多い。ストレートに気持ちを表わす時には、あまり言い換えたりせずにそのまま重ねて述べるようである。賛同や共感を表わすにも、相手の発言そのままのなぞりであることが一体化の効果の上で大きく作用する。一方、内容に対する姿勢の表出には一部変更型が再現型より多く見られた。これは心情的機能のうちでも説的機能とつながる部分なので、上記の伝達上の効果が影響してくるのであろう。

また、心情的機能には要約型は全く現れなかった。

動能的機能

他の機能に比べて再現型の割合が低く、一部変更型の割合が高かった。動能的機能でむやみに同形のくり返しを使うと強引な感じになるためかと思われる。しかし、再現型を避けると同時に、要約型も全くなかった。要約は説明的になり、訴えの効果がかえって薄れてしまうのであろう。

交話的機能

再現型や一部変更型と共に、補足型の割合が大きい。なるべく労力をかけずに発話量を増やすものが好まれるのではないと思われる。補足型は、事例の半数近くがこの機能を持っている。

詩的機能

対句型は特徴的にこの機能と結びついている。再現型は他の機能と比べて割合が目立って低い。大部分を占めるのが一部変更型と対句型だが、この二つのように形のパターンは保持しながらもくり返すごとに少しずつ変化を加えるタイプが、ことば遊びなどの面白味を生むのであろう。

メタ言語的機能

他の機能に比べて言い換え型の割合が大きい。ことばの意味をわかりやすく説明するのに用いられるのである。ことばの問い返しやとりたてには再現型が用いられる。要約型・対句型の事例はなかった。

談話構成的機能

結束の表示には再現型が多い。つながりを明示する上では、もとの発話にあまり変更を加えないものの方が適しているであろう。同様に、話の筋を戻す場合も再現型か一部変更型が多くなっている。発言や話題の収束には、再現型よりむしろ一部変更型や要約型が見られた。この機能には、対句型の事例はなかった。

上記の観察から、形状の違いによるくり返しの表現効果の特徴として、以下の点がまとめられる。

- 再現型は、もとの発話に変更を加える時間・手間を必要としないので、とっさの反応やストレートな表出、手軽に発話をするなどの場合に用いられる。もとの発話と同形なため、発話間の結びつきを示したり、共感の感覚的效果を出したりするのに適している。ただし、形が同じなだけに「くり返している」という印象は強く、やたらに何度も使うとくどい感じを与えるので、回数を重ねて使える場面・状況はある程度限定されるであろう。
- 一部変更型、補足型、言い換え型は、単に同じ形で再提示するよりは何らかの「かみくだき」を施した方が効果のある、理解補助的なくり返しの使用に向いている。また、再現型の「くどさ、しつこさ」の印象を回避するはたらきもある。
- 要約型は、再現型とは対照的に分析度の高いことが特徴である。そのため、心情的機能や動能的機能のように直接的・感覚的な訴えかけを主とするもの、詩的機能のように形自体の妙やよどみないテンポを身上とするものにはまず現われない。それらの機能を果たす上でくり返しに求められる資質を、分析の処理が消してしまうからである。しかし、要約型は情報伝達や発言・話題の収束においては効果を発揮する。
- 対句型はことばのリズム、語呂のよさなど詩的機能において重要な役割を果たす。

5. まとめ、および今後の課題

本稿では、既になされた発話をくり返すという行為が会話の方策として果たす機能を収集し、種類別に記述した。Tannen(1989)が英語について指摘した諸機能を日本語についても確認し、その他の機能も併せて指摘した。また、くり返しのタイプ(誰の発話をくり返すか、出現のタイミング、再現の形状)によって用いられる目的や表現効果にも違いがあることを述べた。

日常会話に現われる様々な発話や相互作用のパターンを文脈の中で検討し、そのコミュニケーション上の役割を明らかにすることは、談話分析のための手段や知見を蓄積する一助となる。本研究もそうした試みの一部となることを意図しているが、会話の方策としてのくり返しの位置づけ・性格を明らかにするには、まだ今後に多くの課題を残している。

まず、今回の考察では言語形式のレベル(語、句、文、など)によるくり返しの違いを検討するには至らなかった。その主たる理由は、「くり返されている部分」がどこからどこまでなのかをあらゆる事例について厳密に認定する基準を現段階で筆者が得ていないためである。ここでは発話をくり返すという行為そのものを考察対象としたので、事例には文字通りの再現から要約まで様々なものを含めた。そのため、言語形式レベルで整理することが困難となった。この点を補うためには、たとえば言い換え・要約類は除外するなど、形のくり返しの面に焦点をしばることも必要かと思われる。

詩的機能でことばの調子には多少言及したが、使用した資料に音調情報が欠けていたので、リズムやイントネーションの面も含めた検討は課題として残っている。同じくり返しでも単にことばの形のみなぞるか、イントネーションなどの話しぶりも再現するかによって、意味合いや表現上の効果が異なってくる。

出現の事例を観察するだけでなく、文法的制約や談話の状況などからくり返しが現われにくい、あるいは不可能な場合についても考察を行なうことで、また別の角度からくり返しの特徴を探ることができるであろう。加えて、会話において同様の機能を持つ他の発話パターン、すなわち方策のレパート

リーに含まれる他の手段との比較検討も意味がある。

本稿ではことばのくり返しを扱ったが、さらに考察の範囲を広げ得る方向として、同種の言語行動（または発話行為）のくり返しがある^(注4)。たとえば母親どうしの会話で一人が自分の子供のいたずらについて話すと、他の母親たちも「ウチノ子ナンテ、コンナコトシタワ」「ウチノ子モ……」と、次々に例を挙げてみせることがあるはずだ。この場合の例挙のように相手と同じふるまいを連ねることも一種のくり返しであり、ことばのくり返しとはまた異なるレベルで談話行動の成立に寄与しているものと考えられる。

また、身振りや発話を連動させたり、その場で起こったことなどをあらためてことばにするような場合がある。たとえば、手を横に振ってみせながら「ダメ、ダメ」と言ったり、相撲観戦中にひいきの力士が敗れたのを見て「アア、負ケチャッタ！」と嘆くなど、何らかの形で既にその場に提示されている情報を言語化してくり返し提示することがある。こうしたものにも、再提示を通した強調や心情表出の機能が備わっている。会話を複数の話者の間の相互作用的行動ととらえるならば、その場における情報の提示について、言語的・非言語的なものの両方を含めた総合的な考察を目指すことが必要であろう。

注1 語のくり返し、文のくり返しなど、要素のレベルで区別した検討は、今回行なえなかった。(第5章参照)

注2 時間・空間を隔てたくり返しにはこれら三点は必ずしもあてはまらない。くり返しともとの発話とが別の会話中に存在するので、とりたての効果もさほど明らかにならず、また2回以上くり返しが重ならない限り「同じ」ものが複数存在することにも、発話の増量にも結びつかないからである。

注3 カッコ内には事例が掲載されている『言語生活』の号数を示す。

注4 この観点については、杉戸清樹氏の御指摘によるところが大きい。

<参考文献>

- Chafe, W.L. (1982) "Integration and involvement in speaking, writing and oral literature" In Tannen, D. (ed.) *Spoken and Written Language: Exploring Orality and Literacy*. Norwood, N.J.: Ablex
- (1985) "Linguistic differences produced by differences between speaking and writing" In Olson, Torrance & Hildyard (eds.) *Literacy, Language and Learning*. Cambridge: Cambridge University Press
- Halliday, M.A.K. & R.Hasan (1976) *Cohesion in English*. London: Longman
- Jakobson, R. (1960) "Linguistics and Poetics" In Sebeok, T.A. (ed.) *Style in Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press
- 牧野成一 (1980) 『くりかえしの文法－日・英語比較対照－』大修館書店
- 中田智子 (1991 a) 「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10-10 pp.52-62
- (1991 b) 「談話における副詞のはたらき」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』国立国語研究所
- 岡本能里子 (1990) 「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72 号 pp.145-159
- 杉戸清樹 (1987) 「発話のうけつぎ」国研報告 92『談話行動の諸相』三省堂
- (1989) 「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8-2 pp.4-14
- Tannen, D. (1984) *Conversational Style: Analyzing talk among friends*. Norwood, N.J.: Ablex
- (1989) *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Cambridge: Cambridge University Press
- ヤコブソン 川本茂雄他訳 (1973) 『一般言語学』みすず書房

<分析資料>

「録音器」『言語生活』

【付記】本稿は、国立国語研究所の研究部会議(1991年10月23日)における発表内容に加筆修正を行なったものである。同僚諸氏の指摘・助言を参考にしたところも多い。ただし、不備な点についての責任は当然ながら筆者にある。